

Listening と Reading 強化の必要

日本語から考えてみても、だれでも経験的に知っていることは、「聞けなければ話せない、読めなければ書けない」ということである。たとえば、Diederich & Carlton 著 *Teacher's Manual for Vocabulary for College B* (1965)には、次のような記述がある。

"A conservative estimate is that the average high school graduate recognizes approximately 50,000 words in his reading but uses no more than 10,000 in his writing and probably less in speaking." (語彙数は控え目に見て、高校卒の場合で、reading に約 50,000 語、writing ではわずか 10,000 語でいど、speaking はそれ以下の語彙が使用されていると思われる)

これから見ても、listening (reading) を広範囲にわたって強化しないと、speaking (writing) は伸びないことが分かる。speaking (writing) は、listening (reading) のうち熟知し切った部分を活用するにすぎないからである。

Listening に必要な自己学習

listening は speaking のために必要不可欠であるが同時に自己学習抜きでは習得できない能力でもある。しかもその学習を完成させるためには、なまじっかの長さではなく数千時間にも及ぶ学習、というよりは無限に近い膨大な量の英語を浴びる必要がある。

listening の学習量は、市販されている 20-30 本のテープ教材でいどでは、とうていまかないきれない。これらテープ教材は、学習の動機づけまたはヒントにはなりえても、学習そのものとはなりえない。listening とはテープ教材の広告でうたわれているほど手軽に習得できる能力ではない。「あなただけが習得できる」といった甘いささやきにはくれぐれもご用心。

listening は自己学習が可能である。その理由は、理解できたかできなかったかは、他人に言われるまでもなく自分で判断できるからである。その点、頼りになるのは、学習者本人であって、指導者でもなく、英語テストでもない。

Listening 教材になりうる条件

listening 教材になりうる条件は「教材が無限に利用できる」ということにある。この条件が満足できなければ、たとえ意欲はあっても、学習は途中で挫折せざるをえない。reading の場合であれば、ペーパーバックでも、雑誌でもいろいろ利用できるので、書店へ行けば読むものがないということはない。これは日本では従来 listening より reading のほうが学

習しやすかった理由のひとつである。今日では、とくに英字新聞は利用価値が大きい。まずまずの料金で毎日宅配してくれるので、reading 学習には便利この上ない。

この条件を満足する listening 教材となりうる素材は何か、その教材は無限に利用できないなければならない。それはラジオ放送である。しかも中級レベルから利用できるラジオ放送として最適なのは Voice of America(VOA)の Special English (特別英語)による放送である。この番組は使用語彙数も 2,000 語ていと少なく、話すスピードも毎分 100 語ていと (日常会話は毎分 150 語ていと)と限られているので、一般学習者にも理解しやすい。

Listening 学習のさいの注意

listening は reading と違って、後ろから前へ逆戻りをして意味を取ることができない。また、時間がないので日本語に訳してから意味を取ることもできない。つまり、listening 学習をする前に、または学習をしながら注意すべき点は、reading 学習のさいに、あらかじめ listening 学習を想定した reading 学習を行うことである。すなわち、何がなんでも、同時通訳のように頭から読んで理解する。絶対に戻らない。日本語はなるべく介在させない。この 2 点に注意すれば listening 学習の効果が上がることは間違いない。

©1997 Yukio Saegusa